

平成二十一年十一月一日発行（毎月1回1日発行）通巻八三八号  
昭和二十五年四月三日第三種郵便物認可

# 火星

平成二十一年十一月号



七曜抄 (六)

山尾玉藻

見てゐたる水に降りきし桐一葉

鹿たちの中ゆき野守ごころあり

月代を塗しビリケンさん撫づる

月待つやライオン橋のライオンも

茶の垣に囲まれゐたる月の家

さびしさの真つ只中の糸瓜かな

誰か一人足りないやうな茸狩

秋日中喪服うなづき合ひゆけり

鬱金の影オクラの影の十三夜

秋風にすこし遅れて笑ひけり

(一部「俳句」十二月号発表作品)

# 太白星

柳生千枝子

耳冷えて遠蝸を聞いてをり  
霧ごめの霧の鳴咽を聞きぬたり  
霧ごもりしてにんげんの匂ひ消す  
鬼灯の匂ひ夕陽の朱の匂ひ  
汐の香の海酸漿を噛んでをり  
唇の色なき目覚め法師蟬  
蝸のそれきりなりし別れかな

杉浦典子

艦の軋む音の真上の白鳥座  
山の端に白き月あり冬瓜汁

蝮 蛄 鳴くや言ひのこすことすこしあり  
ひと日づつ曆消しゆき水澄めり  
風 湿りきし蓑虫の蓑のいろ  
葡萄畑の傾りに風の沿ひゆけり  
仏具屋にアーケード果つ鯛雲

浜口高子

新仏に苧殻のほきと折れにけり  
盆 荒のあと開け放つ柱かな  
雨音に隙ありにけりきりぎりす  
船の灯の近づく宵闇深まりぬ  
塩の温泉ゆに身を浮かせぬる秋灯  
天の川船酔ひの足地に下ろす  
端切れ屋は真四角かさね秋灯す

# 火星作品 山尾玉藻選

滝口を水の押し合ふ土用かな 大和郡山城 孝子

油照夫が孫の手使ひをる

磨崖仏に近よりすぎし水中り

ひぐらしの木に吊しあり地藏の灯

田川の音ちよつと替はりぬ虫供養

墓山の笹の根張れる盆支度 神戸深澤 鱻

風のきて魂棚のものみなそよぐ

種々の匂ひの濃かり盆の家

沖島の百三十戸虫の闇

大桃に鶏冠のいろのひとところ

はたした神紀伊水道を抜けきたり 宝塚山本耀子

施餓鬼寺粒のきはだつ握り飯

海中に流れの段が送り盆

野分中炮烙焼の鯛つつく  
澄む水の雷いかづち神へ来て昏し  
仄ひかる白桃庵主さまは留守  
濡れ髪ぬれがみの娘とゐたる夜の葡萄  
とんかちと男借りけり青瓢  
鶏が刈田を歩く子が歩く  
昼月や買ひ足しに行く盆のもの  
白波の繰り出してゐる盆の闇  
山没日ひぐらしのこゑまぶしたる  
竹林を日照雨の走る法師蟬  
吉丁虫塵芥車よりこぼれけり  
ひとごゑひとごゑに寄り来る秋の水母かな  
山毛櫂やまけの木に耳当ててゐる夏休  
はばかりに大きな駄あり施餓鬼寺  
きりぎりす足場の中の小学校  
秋暑しミイラを覗く地下二階  
水音にへくそかづらの真昼かな

宝塚山田美恵子  
明石戸栗末廣  
八幡大山文子

# 選のあとに

山尾 玉藻

滝口を水の押し合ふ土用かな 城 孝子

勢い良く駆けてきた溪水は、急に狭くなった「滝口」でも早く落ちようと鬨ぎ合う。自然が自然に従った時、そこに思わぬ力が生まれるもの、作者もその激しさに大きなエネルギーを感じたのだろう。同時に「土用」でもある今日の暑さを思い合わせ、自然への畏敬の念を新たにしているようだ。

墓山の笹の根張れる盆支度 深澤 鱈

無事に精霊を迎える為に「墓山」の草刈りを始めた作者は、伸び放題の「笹の根」に少々てこずっているようだ。笹のはびこる様子から、「墓山」の草深さや時を経てきた墓碑の古さまでが偲ばれる。鎌音と共に墓碑に徐々に日が射して、作者の盆を迎える思いも確かなものとなっていたことだろう。

施餓鬼寺粒のきはだつ握り飯 山本 耀子

「施餓鬼」とは本来、飢餓に苦しむ鬼や亡者に飲食を施す

法会を指す。しかし今日では「盂蘭盆会」をそう呼ぶようになり、法会が行われる「施餓鬼寺」では参拝者にも膳や弁当がほどこされる。「粒のきはだつ握り飯」の緊まった表現は、無事先祖に功德をほどこすことができた作者のこころの張り、充実感から自ずと生まれたものであろう。

濡れ髪の娘とみたる夜の葡萄 山田美恵子

「濡れ髪」は情感が溢れすぎるくらいがある語ながら、「夜の葡萄」の瑞々しさがそれを上手く抑えている。作者は娘さんにふと女性を感じ、同じ女性としてえも言われぬ感慨を抱いたのである。母娘の間にしっとりとした風情が漂う。

白波の繰り出してゐる盆の闇 戸栗 末廣

本来は「盆の闇」より白波が限りなく繰り出している景であるのを、作者は敢えてそれを逆転法で表現した。しかし、この思いきった詠法が「盆の闇」に奥行と動きを生んだ。読み手は自ずと、闇の奥にある無限大の闇を思い、あたかもそこより精霊たちが抜け出てくるような錯視さえ覚える。多彩な表現者である。(以下略)

同人 I

# 恒星圈

米澤光子

稻妻や計りこぼれの米の粒  
盆路や筵いち枚ぬかるみに  
とび入りは白狐の面や踊唄  
とんぼうの集まつて来し草野球  
弔客にうしろ見せたる羽抜鶏

飯塚ゑ子

蘭定かず子

漬梅の甕を覗きぬ夜の秋  
蟬殻の仰向く脚に空はあり  
夜の秋の手相見に告ぐ誕生日  
信号を待つ眼に溢る天の川  
夕暮れにまだ間のありぬきりぎりす

隣より飴玉もらふ夏期講座  
香水の近づいてくる握手かな  
円卓の蠅もろとも回り来し  
血管のあり処さぐられ秋暑し  
曲り胡瓜畑に齧れば鴨渡る

大山文子

渡邊美保

苦瓜の雄花ばかりや日雷  
鎌を研ぐ父の背のあり水引草  
新涼や柿の木陰に何もなし  
学校のプール真平ら油蟬  
長長しきアーケード抜け施餓鬼寺

潮の香の溜まる路地裏鳳仙花  
不知火や昔ありけり悪所船  
波音に揺られてをりぬ浜涼み  
沖暗く白波曳けり施餓鬼船  
新涼や麻の葉模様の嬰のべべ

# 獅子座

山尾玉藻推薦

垣岡暎子

渡辺数子

盆僧の項に風を送る役  
手花火やいちばん大ぎ手の祖父に  
君が肩わが肩親し赤とんぼ  
かなかなや何でも遠き姉に聞き

白数康弘

蓮池に風きて嵐気かと思ふ  
紅蓮にきれいになりし夜の水  
御僧の知らぬまに蓮開きけり  
酒の酔ひのこる蓮見の僧二人

西畑敦子

どこよりの盆舟浜に濡れてゐし  
砂山にのる盆舟の乾きぬし  
子等去んで盆舟夕日まみれなる  
夕なづむ波盆舟を呑みゆけり

高橋芳子

榛の木をのぼる南瓜の花の数  
青葉木菟の声かぶりけり詰将棋  
黄金なる雨を降らせて花火果つ  
つり革が顔のまん前晩夏光  
蜘蛛の囀の蟬を放ちて宮津まで  
青年の帯直しやる花火の夜  
橋立の白砂踏める魂送り  
鴉二羽大暑の雨を歩きをり

松山直美

奥飛驒や桶に尻浮く真桑瓜  
今釣りし岩魚叩かれ串刺され  
叡山に月傾ける冷し酒  
献血車に僧の入りゆく日の盛

助口弘子

夕焼くる列にありけり迎へ鐘  
盆すぎの風筋に覚め独りなり  
杖音も風音もけふ秋めける  
落蟬に子連れの猫の行きあへる